

シンポジウム2 企画概要

「旅（ツーリズム）と感情～観光行動における“癒やし”～」

<話題提供>

- 村生和子（近畿日本ツーリスト株式会社）
- 北川弘二（LEGOLAND Japan 株式会社）
- 関谷大輝（東京成徳大学）

<指定討論>

- 山中 弘（筑波大学 人文社会系）

<企画者>

- 関谷大輝（東京成徳大学）

<企画趣旨>

人が「癒やし」を求める時に何を志向するかは様々ですが、そのひとつに「旅」があるのではないのでしょうか。本シンポジウムでは、本大会のテーマである「癒やし」と「旅（ツーリズム）」を掛け合わせ、ツーリズムという視点から「癒やし」という言葉について再考を試みたいと思います。

観光行動には、ゲスト（観光客）、狭義のホスト（客をもてなすホテルやテーマパーク等）、広義のホスト（観光商品の企画やマネジメント等）という登場人物が関わると言われます。したがって、ゲストにとっては、「癒やし」とは旅から享受することを期待するものである一方、ホストにとっての「癒やし」とは、提供すべき「商品」として扱われると言えます。そこには、「癒やし」への全く異なる視点があるはずで

そこで、本シンポジウムでは、「癒やし」というものがどのように商品化され、あるいは人事施策等の企業活動に反映されているのかについて実践的な視点から議論するため、ツーリズム産業の最前線でご活躍の話題提供者をお迎えいたしました。村生氏からは、旅行会社における企画化・商品化という視点から見る「癒やし」とは何かについて、北川氏からは、ホテル勤務や人事部門でのご経験等を踏まえた「癒やし」の提供体制の実際について、それぞれ話題提供をいただきます。また、私、関谷大輝からは、温泉ツーリズムの心理学的検討から、ホスト側から見た旅における「癒やし」について話題提供を行います。指定討論には、宗教学、社会学がご専門で、「宗教とツーリズム」のテーマについてご研究の山中先生をお招きし、産学横断的、かつ学際的に、「癒やし」概念を多角的に考察します。

心理学においては、ある事象を概念化し、操作的定義を行う段階において、本来その概念が持っているはずである情報量が一定程度捨象されてしまうことを避けられません。本シンポジウムは、多様な視点から「癒やし」という概念の捉え直しを行い、「癒やしとは何か」について化学反応的に新たな示唆を得ることと併せ、感情心理学研究において実践現場の視点を持ち続けることの重要性について再考する機会としたいと考えます。皆様のご来場、ご参加をお待ちしております。